

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 6	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Prevalence and risk of colorectal neoplasia in consumers of alcohol in a screening population スクリーニングにおける飲酒習慣のある人の大腸・直腸腫瘍の有病率とリスク	
執筆者	
Anderson JC, Alpern Z, Setjo G, Messina CR, Martin C, Hubbard PM, Grimson R, Ells PF, Shaw RD.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Gastroenterol 2005;100:2049-2055.	
キーワード	
アルコール、スクリーニング、大腸・直腸腫瘍、腺腫	
<p><b>要 旨</b></p> <p>第一線の地域医療に従事する医師から大腸内視鏡検査に紹介されてきた患者の大腸・直腸腫瘍の有病率と危険度を評価した研究である。リスクとしては、特に飲酒習慣およびアルコール飲料の種類による大腸・直腸腫瘍のリスクを検討した。</p> <p>1週間に8杯以上のスピリッツを飲んでいる人は、非飲酒者に比して、腫瘍を持っているリスクは、2.53のオッズ比を有していた。同様に週8杯以上のビールを飲む人も、2.43倍のオッズ比であった。週1-8杯のワインを飲む人では、そのリスクはむしろ低下しており、オッズ比は0.55であった。</p> <p>この研究で、週8杯以上のスピリッツやビールを飲む人の大腸腫瘍リスクは2倍を超えるとし、1-8杯までのワインを飲む人は、そのリスクが低いとしている。</p> <p>(编者注) この研究においても、他の研究同様にワイン飲用者は、社会経済階層がスピリッツやビール飲用者と異なり、また、女性の割合が非飲酒者並みに多かった。教育歴も高く、これらの要因をモデルで補正しているとはいえ、ワインそのものの効果であるかどうかは、疑問のあるところと考える。</p>	